

無アクセント地域におけるアクセント獲得について

— 熊本県菊池市旭志におけるケーススタディー —

板崎 あさみ

1. はじめに

平山（1937）や金田一（1977）により九州中央部には無アクセント地帯があることが指摘されてきた。一方でマスメディアや交通の発達により方言の標準語化が進んできていると言われて久しい。例えば井上（2007）では語彙について方言の標準語化が確認できる。筆者の地元でも、若年層の使用する方言と中年層、高年層の使用する方言では若年層の使用する語彙がより標準語化していると感じられる。このことから使用語彙だけでなく、アクセントも標準語化して無アクセントでなくなってきたのではないかと思い、調査することにした。

2. 標準語化に関する先行研究

郡（2006）には以下のような記述がある。

4) いずれも従来「熊本県北部の一型音調」の地域とされてきた地域で18歳までのほとんどの期間を過ごしている。ただし、2拍語を中心とした類別語彙の簡単な読み上げ調査を行ったところ、若年層の中には、これらを東京式アクセントで発音し、意識としても「飴」「雨」等の区別を東京式で行っている話者もあった。しかし、方言形にアレンジした文まで東京式の音調で言うケースはなかった。

上記の調査は15名の内1名は1992年に、他14名は2002年から2004年にかけて行われている。郡（2006）の15名の話者は高年層、中年層、若年層の3層が存在する。郡（2006）の中ではどの話者が該当するか記載がなかった。しかし、話者はいずれも熊本市及び周辺地域で言語形成を過ごした人物であり、2004年までに無アクセント地域の話者が標準語アクセントを獲得しかけている様子が伺える。

また、井上（2007）では明治維新後の「標準語の時代」に人々は標準語を使いこなせなかったが、戦後の「共通語の時代」から「東京語の時代」へかけて標準語使用が拡大しているとしている。このことから熊本でも、使用語彙の点では若年層だけでなく、中年層より上の世代から徐々に「共通語」化（標準語化）していることが推測される。

ちなみに、井上（2007）の「県別の標準語使用率」の図によると東京は60%強の標準語語彙使用率、熊本は約30%の使用率である。

3. 調査概要

3.1 調査方法

本稿では熊本県北部に位置する菊池市、その中でも旭志（旧旭志村）に絞り調査を行った結果を報告する。調査時期は2019年2月から12月にかけて、調査票を使用した対面での読み上げ調査を行った。話者には原則として調査票を2回読み上げて貰った。調査票に載っている語を2回ずつ発音するのではなく、語を1回ずつ発音してもらって調査を2回繰り返したということである。

【図1】 Google Map より（旭志の位置に☆印）



3.2 調査票

調査票の語彙は五十嵐（2017）から160語、それに外来語と先の160語に対応する同音異義語を加え259語である。1拍語には助詞の「が」「まで」をつけて発音してもらったので、本稿では名詞に助詞を付けて発音したもの（=文

節)も便宜的に「語」と呼ぶとともに、名詞単独とは区別して(語として)数える。

3.3 話者

男女8名の話者に調査を行った。高年層の話者は言語形成期を旭志で過ごした男女3名、中年層の話者は旭志で言語形成期を過ごした女性1名、言語形成期を熊本市で過ごした男性1名、若年層の話者は言語形成期を旭志で過ごした女性3名である。

話者一覧(年齢は調査時点)

a	高年層	71歳	d	若年層	21歳	d母	中年層	46歳
b	高年層	64歳	e	若年層	21歳	f父	中年層	58歳
c	高年層	73歳	f	若年層	22歳			

4. 調査結果

4.1 若年層

・話者 d

若年層の女性話者21歳(話者d)は2回発音した同じ語について、それらのピッチパターンが一致した語数が188語、不一致の語数が62語である。1回の調査票読み上げ時に2回読み上げてしまった場合などは、“測定不能”として9語をデータから省いてある。

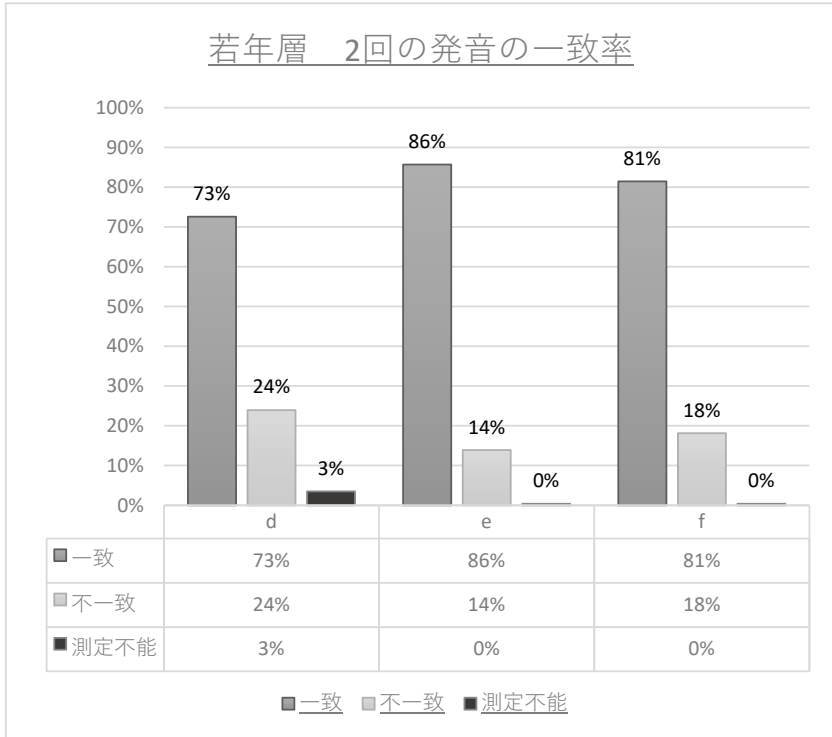
・話者 e

若年層の女性話者21歳(話者e)は2回のピッチパターンが一致した語数が222語、不一致が36語、測定不能で除外したのが1語である。

・話者 f

若年層の女性話者22歳(話者f)は2回のピッチパターンが一致した語数が211語、不一致が47語、測定不能で除外したのが1語である。

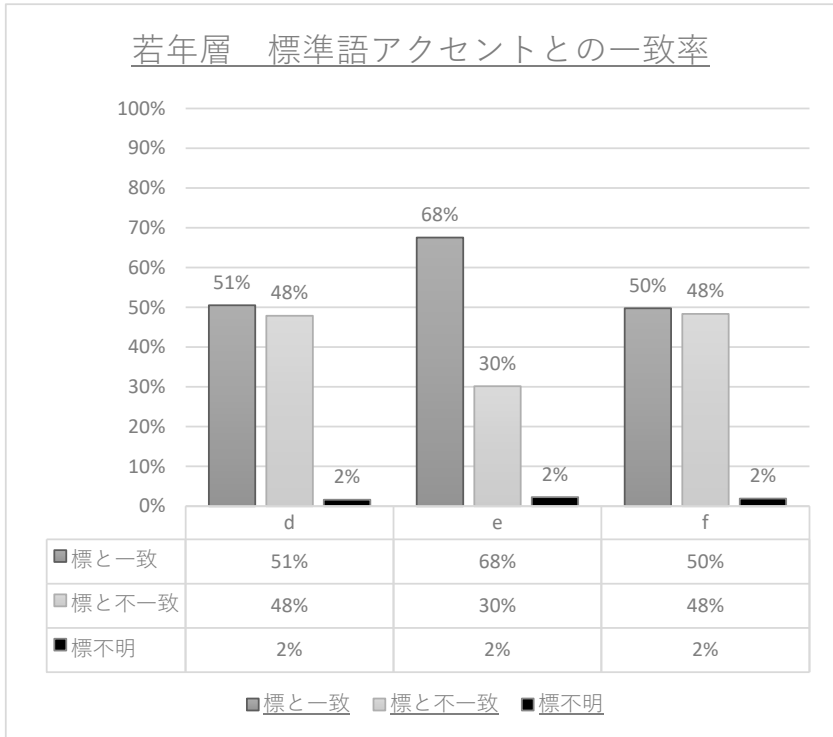
【表 1】



4.2 若年層のピッチパターンと標準語アクセントの比較

本節では、若年層が標準語アクセントを獲得しているかについて考察する。具体的には、若年層の読み上げ調査の結果2回とも同じピッチパターンで発音された語に注目して標準語アクセント（のピッチパターン）と比較して一致率を調べた。以下の表2に話者別に示す。標準語アクセントは『新明解日本語アクセント辞典 第2版』（三省堂）によった。

【表 2】



先に述べたように読み上げ調査で発音が2回とも一致した語数はdが188語、eが222語、fが211語だった。そして、話者dについてはその188語の内、標準語アクセントと一致していた数が95語、一致しなかった数が90語、2回の発音は一致していたものの標準語アクセントが不明な為比較できなかった数が3語となった。同様に、話者eについてはその222語の内、標準語アクセントと一致していた数が150語、一致しなかった数が67語、2回の発音は一致していたものの標準語アクセントが不明な為比較できなかった数が5語となった。最後に話者fについてはその211語の内、標準語アクセントと一致していた数が105語、一致しなかった数が102語、2回の発音は一致していたものの標準語アクセントが不明な為比較できなかった数が4語であった。

全体としては標準語アクセントとの一致率は偶然の域を出るほど高いとは言えない。要するに、標準語アクセントを獲得しているとは言いがたい結果である。

しかしながら、同じ語を2回発音したそのピッチパターン的一致率に注目すると年齢層別に興味深い結果が出ているため、以下ではそちらに論の焦点を絞る。

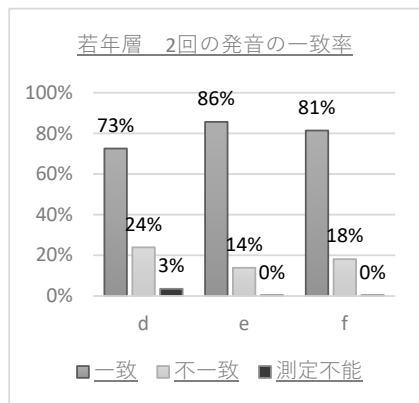
4.3 若年層と高年層の2回発音一致率比較

高年層の男性話者71歳（話者a）は言語形成期を旭志で過ごしている。集落内での移動はあるものの、旭志以外での居住歴は無い。2回発音のピッチパターンが一致した数は148語、不一致が101語、測定不能として除外したのが10語。パーセントにすると、57%、39%、4%となる。

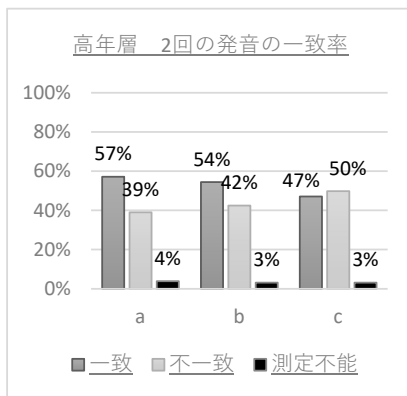
高年層の男性話者64歳（話者b）は言語形成期を旭志で過ごした後、30歳まで愛知に居住していた。40代に半年ほど東京に居住歴があり現在は旭志に住んでいる。2回発音のピッチパターンが一致した数は141語、不一致が110語、測定不能が8語となった。パーセントにすると、54%、42%、3%となる。

高年層の女性話者73歳（話者c）は言語形成期を旭志で過ごしている。集落内の移動はあるものの、旭志以外での居住歴は無い。2回発音のピッチパターンが一致した数は122語、不一致が129語、測定不能が8語となった。パーセントにすると、47%、50%、3%となる。

【表3】（【表1】を再掲）



【表4】



上記の表3と表4から、若年層の2回発音一致率と高年層の2回発音一致率を比べてみると、若年層では73%、86%、81%となっているのに対して、高年層では57%、54%、47%と若年層より20～30%程度低くなっていることがわかる。そして、若年層、高年層ともに、同じ年齢層では2回発音一致率の個

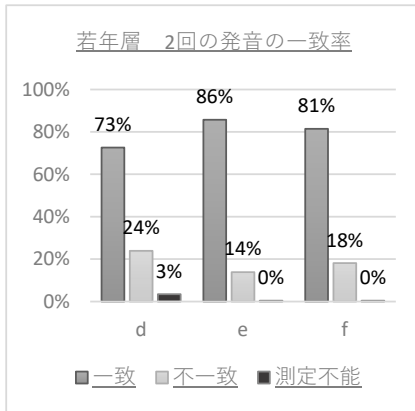
人差が小さい。すなわち、若年層は総じて高く、高年層は総じて低いのである。

4.4 若年層と中年層の比較

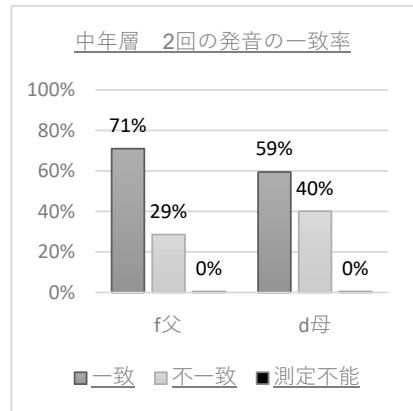
中年層に対しても同様の調査を行ったので結果を若年層と比較しつつ示す。話者は話者 f の父親（f 父）と話者 d の母親（d 母）の 2 名である。なお、f 父は熊本市で言語形成期を過ごしている。d 母は旭志の生え抜きである。

興味深いことに 2 回発音の一致率は高年層と若年層のちょうど中間的な数字となっていることがわかる。（表 5・表 6）

【表 5】（【表 1】を再掲）



【表 6】



5. 若年層に共通するアクセントがあるかどうかの検討

4.2 節で述べた通り、若年層は標準語アクセントと 2 回の発音の一致率が低く、標準語アクセントに沿った発音では無い。

しかし、4.3 節で述べた通り若年層話者の発音 2 回の一致率は無アクセント地域の高年層に比べ高いことは事実であるので、本節では若年層のアクセント意識に（標準語とは異なった）共通ルールが無いかどうかについて拍数（文節の長さ）別に検討していく。

ここで使う語数は、各話者の 2 回の発音が一致したものである。話者 d からは 105 語、話者 e からは 117 語、話者 f からは 116 語が得られた。これらを合わせてのべ 338 語を検討に使用する。338 語には話者 1 名しか 2 回発音が一致していない語、話者 3 名とも 2 回が一致した語など、同じ語彙を重複して含む

場合があるので注意されたい。

5.1.1.2 拍語

・ 単語単独

2拍語は274語（/338語）、ピッチパターンはHH・HL・LHの3種類に分けられる。（以下、Hは高く発音された拍、Lは低く発音された拍を示す。）HHは3人合わせて7語、HLは3人合わせて97語、LHは3人合わせて170語であった。

・ 1拍語に助詞付き

2回の発音が一致する単語の中で1拍語に助詞「が」を付けた2拍での発音は3人合わせて、64語（/338語）、全てHLで発音されていた。

5.1.2.3 拍語

・ 単語単独

3拍語の単語は159語（/338語）、ピッチパターンはHHH・HHL・HLL・LHL・LHH・LLHの6種類に分けられる。以下に内訳を示す。

HHH

話者dは5語、話者eは4語、計9語。話者fはHHHの3拍発音なし。

HHL

話者dは11語、話者eは8語、話者fは3語、計22語。

HLL

話者dは3語、話者eは11語、話者fは1語、計15語。

LHL

話者dは2語、話者eは3語、話者fは2語、計7語。

LHH

話者dは12語、話者eは29語、計41語。話者fはLHHの発音なし。

LLH

話者dは16語、話者eは7語、話者fは42語、計65語。

・ 1拍語に助詞付き

1拍語に助詞「まで」を付けての3拍発音は3人合わせて61語（/338語）

だった。アクセントは HHL・HLL の 2 種類見られた。HHL は、話者 d が 20 語、話者 f が 19 語だった。HLL は、話者 e が 20 語、話者 f が 2 語だった。

5.1.3.4 拍語

3 名合わせて 25 語 (/338 語)、ピッチパターンは HHHH・HHLH・HHLL・LHLH・LHLL・LLLH・LLHH の 7 種類が見られた。以下に内訳を示す。

HHHH

話者 d は 2 語、話者 e は 1 語、計 3 語。

HHLH

話者 d の「ニュース」1 語のみ。

HHLL

話者 d は 3 語、話者 e は 6 語、話者 f は 4 語、計 13 語。

LHLH

話者 d の「マキガイ」1 語のみ。

LHLL

話者 e の「マキガイ」1 語のみ。

LLLH

話者 d の 2 語のみ。

LLHH

話者 e は 2 語、話者 f は 1 語、計 3 語。

5.1.4.5 拍語

発音されたピッチパターンは LLLLH・LLHHH・LLHHL・LHHLL・HHHLL・HHHHL の 6 種類見られた。語数が少ない為、詳細な分析から除外する。

5.1.5.6 拍語

発音されたピッチパターンは LHHLLL・LHHHHL・LHHLLH の 3 種類見られた。語数が少ない為、詳細な分析から除外する。

5.1.6 助詞付きの場合について

2 拍語単独では LH が 170 語と HL の 97 語の約 2 倍の数であるため何らかのアクセントルールがある可能性が疑われるが、本稿では LH になる場合と HL

になる場合の違いを一般化することができなかった。

4拍語、5拍語、6拍語はそもそも調査票に入っている語自体が少なく、更に2回の発音が一致したものだけを使用する為、アクセント体系に言及できる考察が出来ない。

助詞を付けた場合の発音に注目すると、1拍語に助詞「が」が付いた2拍発音の場合はHLのみ、助詞「まで」が付いた3拍発音の場合はHHLかHLLの2種類だけが見られた。助詞付きの2拍発音と3拍発音のピッチパターンに見られる共通点は最後が低く発音されていることである。

それに対して5節で示した若年層3名の2拍語単独の発音では、HLは3名合わせて97語、LHは3名合わせて170語であった。HLとLHの内訳を表7に示すが個人差は小さい。従って、2拍の単語単独の発音ピッチパターンにおいて若年層に共通して優勢なアクセントはLHと言える。以上から、単語単独な優勢なアクセントに引っ張られ、助詞「が」が付いた場合にHLになりやすいとは言えず、1拍語に助詞「が」を付けた2拍の発音では2拍目が下がるという共通ルールが見出せる。

同様に、若年層の3拍語単独の場合はHHH・HHL・HLL・LHL・LHH・LLHの6種類があったことを考えると助詞付きの3拍発音がHHLかHLLの2種だけであることは注目に値する。HHLとHLLの内訳が表8である。

【表7】

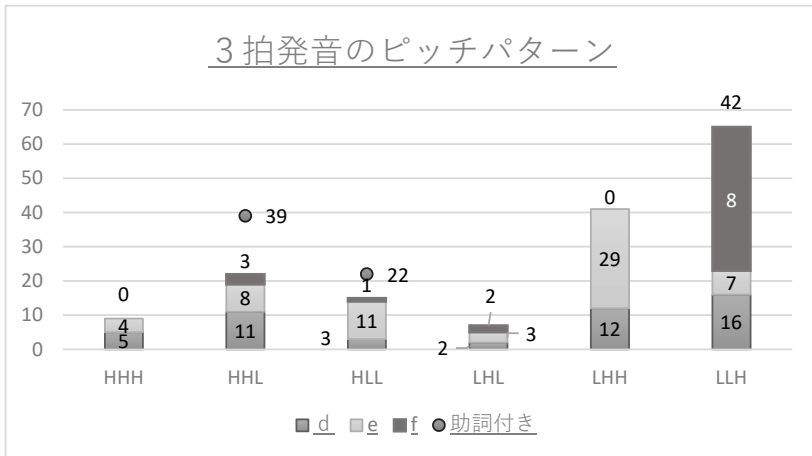
HL	d	e	f	計
単語単独	24	34	39	97
助詞付き	22	22	20	64
計	46	56	59	161
LH	d	e	f	計
単語単独	52	61	57	170
助詞付き	0	0	0	0
計	52	61	57	170

【表 8】

HHL	d	e	f	計
単語単独	11	8	3	22
助詞付き	20	0	19	39
計	31	8	22	61
HLL	d	e	f	計
単語単独	3	11	1	15
助詞付き	0	20	2	22
計	3	31	3	37

3 拍の発音に関しては HHL と HLL の 2 種類あるが、これは下がるタイミングが早いかどうかの違いであり、最後に下がるという共通点を見出せる。

【表 9】



上記の表 9 に示すように、3 拍発音の中で 3 名合わせて見た場合、優勢なピッチパターンは LHH と LLH だが、2 拍名詞に 1 拍助詞がついた場合は HHL と HLL しか見られない。話者 e は表 9 より 3 拍の発音で LHH が優勢だが、表 8 より助詞「まで」が付いた 3 拍の発音は HLL のみしか確認できない。話者 f は表 9 より 3 拍の発音で LLH が優勢だが、助詞「まで」が付いた 3 拍の発音

は HHL と HLL しか確認できない。

助詞を付けた 1 拍語の 2 拍・3 拍発音の最後に下がると言う共通点は助詞がついた場合のイントネーションである可能性も高いが、今回の調査からは断言できない。ただ少なくとも助詞がついた場合に単語単独よりもピッチパターンが偏って表れることは確かである。

6. 考察

6.1 標準語アクセントの獲得について

4 節を中心に旭志の若年層は標準語アクセントを獲得しているかどうか考察した。4.1 節に示した通り若年層の調査票の 2 回の発音が一致している語と標準語アクセントを比較した場合、その一致率は 50～60% 程度に留まった。このことから旭志の若年層は標準語アクセントを獲得していないことが分かった。しかし、高年層にも同じ調査を行い若年層と比較した結果、高年層に比べ若年層の 2 回の発音のピッチパターンが一致する率が高いことが分かった。中年層とも比較した結果、2 回の発音の一致率が高い順に若年層、中年層、高年層となった。これが示唆しているのは、年代が若くなるにつれて段々と個人の中に決まったアクセントもしくは発音しやすいピッチパターンが増えつつあるのではないかと、すなわち、長い時間をかけて、無アクセントが有アクセントに変わり始める兆しなのではないだろうか。

高年層や中年層に比べ 2 回の発音の一致率が高い若年層であるが、不一致率が 20% 前後あることも無視できない。このことから、旭志の若年層がアクセントを獲得する流れの中にあるとしても、アクセント獲得の初期段階に当たると考えられる。

井上 (2007) に「標準語・共通語は文字に書かれるもので、文字を通じて地方に普及したのですが、いまはテレビなどを通じて、東京の話しことばが普及しつつあります。」とある。

1 節に記した通り、筆者自身若年層は使用する語彙が標準語化していると感じる。しかし、今回の調査の結果、熊本の無アクセント地帯に住む若年層はアクセントについては標準語化していないことが分かった。

これは井上氏のいう「文字からテレビなど」という順序通りに、旭志の話者も標準語化しつつあると言えるのではないかと考えられる。文字教育が先になされたため、高年層や中年層の代から使用語彙が標準語化し始め、若年層は学校教育に加え先に使用語彙が標準語化していた高年層や中年層の話す言葉から

影響を受け、使用語彙が標準語化しているのではないかと考えられる。しかし、テレビなどは文字教育に比べ影響を与えている年数が短く、高年層や中年層は使用語彙に比べ影響を多く受けられず、若年層は大人からのアクセントや標準語アクセントの影響を受けられなかったと考えられる。よって、若年層はアクセントについての影響を受けられる機会が使用語彙に比べ少なかった為、アクセントや標準語アクセントの獲得に至らなかったと推察される。

6.2 若年層に共通するアクセントルールについて

若年層と高年層（および中年層）を比較した際、若年層は2回の発音の一致率が高年層より高いが、標準語アクセントと比較してみるとアクセントの一致率が低く、若年層は標準語アクセントを獲得しているとは言えない。しかし、6.1節でも述べたが、若年層は高年層より2回の発音の一致率が高い。そのため、若年層は個人の中だけでなく、同世代の中で共有する何かしらのアクセントのルールがないかを5節で検証した。

5.1節では語（文節）の拍数ごとにピッチパターンを検討した。5.1.6節で示した通り、1拍語に助詞の「が」「まで」を付けた2拍・3拍の発音の際、必ず最後が低くなる結果になった。例えば、話者fの場合LLHが3拍語単独において優勢なピッチパターンであるが、1拍語に助詞「まで」を付けた3拍発音ではHHLとHLLの2つのアクセントしか見られない。このように話者の中に単語単独の発音において優勢なピッチパターンがあっても、助詞を付けた語はその優勢なピッチパターンとは別のピッチパターンで発音していた。この点は2拍語でも3拍語でも同じであり、助詞付きの発音では下降で終わるという規則はあるようである。しかし現時点では、それがイントネーションである可能性が高い。ピッチの下降位置については、助詞が付いての3拍発音のピッチがHHLとHLLの2種類だったことを考慮すると、若年層の共有する最も重要な傾向は最後が下がることであり、どこで下がるのかというは大きな問題では無いと考えられる。

5節で助詞付きの単語のピッチパターンについては共通する傾向を観察することができた。しかし単語のピッチパターン全般に関しては傾向を導き出すのはとても困難である。

7. まとめと今後の課題

旭志は高年層の結果から伝統的に無アクセント地域であることに疑いは無

く、中年層、若年層もアクセント体系はやはり無アクセントと言える。しかし2回の発音の一致率が高い順に若年層、中年層、高年層であり、若年層のほうが高い一致率であることから、若年層においては語彙によって個人の中にある程度決まった、もしくは、発音しやすいピッチパターンがあり、それに従い発音しているということが伺える。もっとも、6節で示した通り、若年層話者3名に共通するアクセントがあるとまでは言えない。従って、現時点では、無アクセント地域の話者がアクセントを獲得する前段階、もしくはアクセント規則の芽生えの極めて初期の段階にあるのではないかと推察される。

今後の課題として、5節で述べた助詞を付けた場合の発音がアクセントによるものなのか、イントネーションやその他の理由によるものなのか語数を増やし調査する必要がある。併せてイントネーションの調査も行い、助詞を付けた場合の発音がイントネーションの影響からなのか調査する必要がある。

もう一つ今後の課題として、旭志以外の熊本の無アクセント地域で本調査と条件を合わせて調査した場合、同じ結果が出るかどうか調べる必要がある。調査結果が本稿同様に2回（以上）の発音の一致率が高い順に若年層、中年層、高年層となれば、無アクセント地域全体の流れと言える。

今後も継続して調査を行うことで無アクセント地域の話者がアクセントを獲得していく様子を捉えることが出来る可能性があると考ええる。

若年層が使用する語彙が標準語化しているが、今回の調査の結果、熊本の無アクセント地域に住む若年層はアクセントについては標準語化していないことが分かった。日常使う語彙等アクセント以外の面が標準語化しても無アクセントのままであるのは、無アクセント地域の話者のそもそものアクセントへの関心の低さ、アクセントの重要度の低さを示しているようでもある。

【参考文献】

五十嵐陽介「琉球語アクセント調査票 160」一橋大学大学院社会学研究科博士課程ゼミ発表レジュメ、2017年。

(https://researchmap.jp/mu90b7by3-1856949/?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=155367&metadata_id=76754)、2018/12/24 保存

井上史雄『変わる方言 動く標準語』筑摩書房、2007年。

金田一春彦『岩波講座 日本語 11 方言』岩波書店、1977年。

金田一春彦[監修]『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』三省堂、2016年。

郡史郎「熊本市及び周辺の非定型アクセント方言における語音調と音調句の形成」『音声研究』第10巻第2号 p43 - 60、2006年。
 平山輝男「九州方言に於けるアクセントの諸相」『日本音声学協会会報』45、1937年。

【参考資料】

Google マップ、
 (<https://www.google.com/maps/@32.5620813,130.8819392,9.31z?hl=ja-JP>)、 2020/03/23 保存

謝辞

本稿は筆者の卒業論文（平成31年度、熊本県立大学文学部）の一部に加筆修正したものです。今回調査にご協力いただいた話者に心よりお礼申し上げます。論文執筆にあたって、ご指導いただいた小川晋史先生に厚く感謝いたします。

【付録】 調査に使用した語彙一覧

帆	苧	牛	妻
血	麻	石	網
緒	糸芭蕉	紙	犬
紐	子	型	戌
名前	飴	形	山
葉	烏賊	川	皮
日	魚	井戸	肝
世	風	泉	肝臓
時代	腰	胸	心
毛	背中	夏	雲
夜	釘	橋	草
夜	口	梯子	糞
湯	水	人	豆
木	北	冬	耳
目	鼻	夫	波
菜	筆	下	花
火	酒	上	島
穂	袖	西	村
手	竹	臭い	舌
歯	鳥	香り	丈
家	西	大蒜	身長

角
錐
板
肩
麦
苗
鑿
汁
藁
雨
涙
亀
蛸
踵
戸
雨戸
茅
着物
布
去年
蝻
貝
巻貝
土
地震
実
果実
南
南風
唇
舌
唾
腹
腸
瓶
蚤
骨
息

糸
宿
松
中
海
針
箸
梢
臼
蔭
影
蜘蛛
声
前
婿
鍋
笊
籠
飛蝗
蝗
茸
黴
垢
汚れ
砂糖
太陽
籠
粒
豚
涎
竈
麴
河原
川
煙
鼻血
八つ
四つ

三つ
六つ
二つ
東
黄金
宝
膝
七日
表
顔
鶉
油
命
枕
汗疹
鱗
ふけ
大和
日本本土
夜中
腕
二の腕
脹脛
膾
刺身
田螺
扇
刀
包丁
白髪
瓦
情け
柱
虱
一つ
烏
蚊
蚋

草笥
笊
籠
箕
童
子供
意図
待つ
赤
プリン
コイン
キリン
バター
ピアノ
ガソリン
カーテン
アイロン
スーパー
コーヒー
タクシー
セーター
パトロール
マッサージ
レントゲン
ボランティア
パスポート
パン
ペン
アイス
ニュース
シャンプー
アパート
メモ
ハム
ラジオ
タオル
アルバム
オムレツ